

『失われた時を求めて』における『ル・フィガロ』掲載記事』(2)

“L'article du Figaro” in “A la recherche du temps perdu” (2)

——生成学的観点から——

山崎俊明

序

前稿⁽¹⁾では、マルセル・プルースト作、未完の小説『失われた時を求めて』⁽²⁾において、話者の最初の公的文学活動である『ル・フィガロ』掲載記事⁽³⁾の正体が、実は、小説の死後刊行部分、『見出された時』⁽⁴⁾冒頭の章「タンソンヴィル」の中に在る『ゴンクール未発表日記』模作⁽⁵⁾(nP.IV,287-295)と密接に関わるものではないか、さらには、「模作」に加筆・修正し「記事」として、『逃げ去る女』⁽⁶⁾にあった「記事掲載日の午後のゲルマント邸」(nP.IV,152-172)とともに、「タンソンヴィル」に結びつけて一章を作成することを、死の直前にプルーストが考えていたのではないかという点を検討した。その際に我々は「記事掲載日の午後のゲルマント邸」に現れた不可解な要素、すなわち、一、エルスチールの名前が「記事」に現われているという指摘(nP.IV,163)、二、ゲルマント侯爵がエルスチールの名を聞いて、「それは私の従姉だ」と叫びでもしたかのように荒々しく叫んだ、と話者が語ったこと(ibid.)、三、「記事」の特徴として「聖水盤」と「午後五時のお茶会」という言葉が挙げられていること(nP.IV,170)、四、話者がエルスチールの名を口にしたにも拘らず、ゲルマント侯爵夫人は、「話者がスワンの名を口にする」と思い、さらに、話者も「スワンの名を口にしようになったこと」を認めたこと(nP.IV,163-169)、五、「シャトブリアンの時代遅れの散文に見られる隠喩」が「記事」に現れていること(nP.IV,169)、これら五要素を、「模作」との呼称などから考察し、これらの要素が「不可解」なのは、これらの要素を含

んだテキストが書き終えられた時点で、プルーストが「模作」を加筆・修正して「記事」にすることを示唆するための「伏線」としたからだ、と考えたのであった。

本稿では、「模作」が「記事」となるはずだった、という前提に立ち、前稿では触れなかった生成学的観点から、いつから「模作」が「記事」と密接な関係を持ちはじめたのかを推定してみたい。

Ⅱ. 「記事」が「模作」となった時期⁽⁶⁾

前稿では、プルーストが死の直前にセレストにメモさせた「アルベルチーナのアイスクリームの鋳型」に関するメモ⁽⁷⁾と、そのメモを入れた封筒の上にプルースト自身が、まさにその時に書きつけた、「記事掲載日の午後のゲルマント邸」を「タンソンヴィル」に組み込むというメモ⁽⁸⁾とを考慮することにより、プルーストが死を前にして、「模作」を加筆・修正したものを「記事」にしようとしていた、と我々は判断した。

この、「シャトーブリアンの時代遅れの散文に見られる隠喩」と関わる「アルベルチーナのアイスクリーム」は、以下に述べる四段階を経て最終稿となる。すなわち、プルーストがその典拠となるテキストを探し始めた時期、彼の実生活とのかかわりが見られる時期、『囚われの女』の第三タイプ原稿に挿入した時期、死の直前にメモに書きつけた時期だ。いずれもが書簡⁽⁹⁾等での言及から比較的正確に定めることが可能である。つまり、一、1921年8月末、典拠探し、二、1922年5月以降、アドレナリン無水摂取により胃を火傷し、アイスクリームを食事がわりとする (Cor. XXI, p. 230, etc.)、三、1922年9月～10月末、『囚われの女』の第三タイプ原稿に挿入⁽¹⁰⁾、四、1922年11月18日、死の直前にメモを書く。

これらの時期的指標をまず留意しておこう。

Ⅱ-1. 「記事」掲載日」の生成過程から見た場合

「記事」掲載当日を描いた部分の生成過程は、中野知律氏によって五段

階に大別されており、今しがた我々が分析した各要素は、主に第五段階(1917-1922年)に属し、清書カイエXIV執筆(1916-1917年以降)後、同カイエを書き直した後にタイプした(1922年5月頃から6月25日)⁽¹¹⁾部分に属する。

さて、この清書カイエXIVには、第二段階にある下書きカイエ48(1910-1911年に右側の頁執筆)⁽¹²⁾の左側(加筆用)の頁から切り取られた頁・紙片が挿入されており⁽¹³⁾、「記事」が「模作」を示唆する要素の幾つか(前稿 I-1.で見た「エルスチールと「記事」との関係」、前稿 I-1-2. で見た「私の従姉だ」)も当初はカイエ48の左側の頁に書かれたものだった(papier découpé du fo 38vo du Cahier 48, puis collé sur le fo 22 du Cahier XIV)⁽¹⁴⁾のだ。また、前稿 I-3.で見た、ゲルマント侯爵夫人が述べる「スノビズム」についての文も、カイエ48の左側の頁(fo 39vo)から現れる。カイエ48の左側の頁の執筆期が定まれば、「記事」が「模作」となった時期を解明する手がかりとなるのではないか。この左側の頁の執筆時期が、カイエ48の右側の頁と同時期なのか、それとも清書カイエ執筆初期と同時期なのか、あるいは清書カイエを書き直した時なのかを識別する必要がある。

カイエ48を見ただけでは、右側の頁の執筆と、左側の頁の執筆との、時期的な隔たりや接近を示す手がかりが無いので、まず、清書カイエXIVの該当部分執筆の初期状態を、文の繋がり、切り取り、書体を手がかりに復元し、カイエ48の左側の頁との関係を検討したい。

清書カイエXIVで、当初、「ゲルマント邸」の最終部分は、現在ffos 21, 33, 34, 22と頁付けされている四頁で構成され、この順序で、一続きのテキストとして書き終えられていた⁽¹⁵⁾。そこでは、前稿 I-3.で見たスワンに関する会話とは違い、スワンは「記事」に関与しておらず、「スノビズム」に関係する侯爵夫人の言葉も描かれておらず、スワンはエルスチールの絵によって思い出されることになっていたのである(fo 21の抹消部分と同頁から切取られfo 32に移された部分)。この結構は、カイエ48の

右側の頁 (ffos39ro-40ro)に描かれたものを清書したものであるから、清書カイエXIVの第一執筆期に到っても、「記事」とスワンとは、まだ結び付いていなかったのだ。よって、カイエ48、fo39voに「スノビズム」に関する文章が書かれたのは、清書カイエXIVの第一執筆期よりも後であろう。

次に、この第一執筆期から、清書カイエXIVの現状にいたるまでの変化の概略を再構成し、カイエ48の左側の頁の執筆期との関係を定めたい。プルーストはまず、最終部分である、上に述べた四頁の内の二枚 (ffos, 33, 34) を、後に利用するために切取り、fo 22 に書かれていた部分 (僅か一行である) を抹消し、次に、カイエ48、fo 38voから、既に文章が書かれた部分を切取り、その紙片をfo 22に貼付け、その紙片に続けて文章を書き、fo 32冒頭まで書き続け、その後、既に抹消線が引かれたfo 21の下側三分の一を切取り、fo 32の文に続くように貼付け、さらに文を書き続け、先に切取っておいた二枚を清書カイエXIVの頁ffos33, 34に貼付ける⁽¹⁶⁾。この、「ゲルマント邸」の「書き直し」以前に、カイエ48の左側の頁に、「記事」が「模作」であることを示す要素の幾つかが下書きとして書かれたのである。というのは、今しがた見たように、清書カイエXIV第一執筆期には無かった「スノビズム」に関する文章 (fo 31) が、カイエ48、fo 39vo を清書したものとして登場するからだ。また、「エルスチールと「記事」との関係」と「私の従姉だ」の二要素も、清書カイエXIVの初期には存在しないので、カイエ48、fo 38vo にこの二要素が書かれたのは、清書カイエXIV冒頭部の「第一執筆期」よりは後であり、「書き直し」よりは前であるはずだ。

カイエ48には存在しないが、前稿I-4.で見た「シャトーブリアン」の「隠喩」が登場する (ffos 30ro-31ro du Cahier XIV) のが、「書き直し」の時点から⁽¹⁷⁾ であることも考慮すれば、カイエ48の左側の頁に、「記事」が「模作」であることを示す要素が現れたのは、清書カイエXIVの「書き直し」に際してであると言えよう。

とはいえ、「書き直し」の時期に具体的な年代を与えることは困難であり、清書カイエXIV全体の執筆期もその指標とはならない。というのは、清書カイエXIVでは、このゲルマント邸の挿話と、それに続く別の挿話との間に二頁（ffos 35-36）の空白が残され、二頁とも「ツメ」の指示線が引かれている⁽¹⁸⁾ので、当初、ゲルマントの挿話だけが、時期的に独立して執筆された可能性があるからだ。「書き直し」の時期を明確に定める要素は、今のところ無いように思われる。

「記事」が「模作」である時期の指標として有力なものは、前稿I-2.で見たブロック発言（papier collé sur le fo 32ro du Cahier XIV）の根拠となった記事の掲載日、すなわら、ド・ラ・フウシャルディエール氏の記事「選挙用料理」が『ルーブル』紙に掲載された日⁽¹⁹⁾があるので、この日付を根拠とし、「記事」と「模作」とが一致し始めるのは、とりあえず1919年12月12日以降としておこう。

今度は、「模作」が「記事」となる時期的指標を「模作」の生成過程に探ってみよう。

II-2. 『『ゴンクール未発表日記』の模作』の生成過程から見た場合

『『ゴンクール未発表日記』の模作』に関して、現在我々が参照できるテキスト群は、八種類に大別できる。「模作」そのものについては、「下書きカイエ55」にある「第一模作」⁽²⁰⁾、「第二模作」⁽²¹⁾、この両者が統合され、清書カイエXV,XVIに書かれた最終稿である「模作」の清書⁽²²⁾の三種類。

「模作」に関するメモ、批評、文学論等が書かれたものは四種類ある（以後「模作メモ」と呼ぶ）。まず、「第一模作」の前の頁から書かれたもの（以後、「前メモ」と呼ぶ）⁽²³⁾。次に「第二模作」の後の頁に書かれたメモ群（以後、「後メモ」と呼ぶ）⁽²⁴⁾、そして、下書きカイエ74にあるメモ群（以後、「74メモ」と呼ぶ）⁽²⁵⁾、清書カイエにあるテキスト（以後「清書模作メモ」と呼ぶ）⁽²⁶⁾、である。

最後に、小説中のテキストではないが、「模作」に関する言及を含む新

聞記事、「ゴンクール兄弟とその末裔たち」⁽²⁷⁾がある。

これらの資料全体を考慮に入れ、まず執筆期⁽²⁸⁾を再検討しなければなるまい。というのは、現在のところ、「第一、第二模作、及び模作メモ」の執筆期に関しては、時期的に大幅に開きのある二説が存在するからだ。本論が準拠する執筆期を定めた上で、「記事」との関係を検討しよう。

II-2-1. 「模作」の執筆期再考

ジャン・ミー氏は、カイエ55の「第一、第二模作」双方の執筆期を1917年11月17日から1918年10月9日とした。「第二模作」の加筆部に、「忘却」を「撃沈」される「ドイツ潜水艦」に譬えて説明した文章がある(fo 77vo)ことから、ドイツ軍の潜水艦による戦闘の失敗という史実の反映を見たのである⁽²⁹⁾。一方、吉川一義氏によれば「潜水艦」に関する言及は加筆・修正用の左側の頁にあるので、「模作」の草稿自体の執筆は「加筆」以前であり、また、当時まだ草稿段階にあった『逃げ去る女』をプルーストが要約し、シェイケビッチScheikevitch夫人へ献辞として送った時期(1915年11月3日より少し後)⁽³⁰⁾に「模作」の草稿は書かれていたことになり、その結果「模作」草稿の執筆開始は1915年末となった⁽³¹⁾。

本論では、「第一模作」及び「第二模作の加筆部にある潜水艦に関係するメモ」は、1915年3月11日付のリュシアン・ドーデー宛の手紙よりも後に書かれたとする。というのは、このドーデー宛書簡において、「第二模作の加筆部にある潜水艦に関係するメモ」との共通点が、その執筆期を示唆しているからだ。ともに「潜水艦」への言及があり⁽³²⁾、備忘録であるはずのゴンクールの『日記』を読んでいるにも拘らず、その内容をすっかり忘れてしまうということがある⁽³³⁾。さらに、「第一模作」と具体的に一致する要素である「ユゴーの葬式」と「ラップランドでのユゴーの作品に対する盲目的崇拜」までもが存在する⁽³⁴⁾ことから、この書簡で述べられた事柄が「模作」に反映していることは間違いない。

加えて1915年6月末に書かれたとされる書簡⁽³⁵⁾にも、「模作」がこの時

期の出来事に着想を得ていると思わせる要素、「ホテル・ダングルテール」での昼食」が存在するのだ。この建物が、「模作」に描かれている「夜会」を催した際のヴェルデュラン邸のモデルだと考えられるのである。というのは、まず、ホテル・ダングルテールはジャコブ通44番地にあり、ヴェルデュラン家は「第一、第二模作」双方においてコンチ河岸（カイエ55, fo 64ro : nP.IV, 751 ;同カイエ, fo 71ro : nP.IV, 754）にあり、両建造物は地理的に極めて近いところに位置するからである。次に建物の由来が酷似していることが両者の共通点として挙げられよう。ホテル・ダングルテールは元イギリス大使館邸（同ホテル92年発行のパンフレットによる）であり、ヴェルデュラン邸は、「第一模作」では「ヴェネチアの官邸を思わせ」（カイエ55, fo 64ro : nP.IV, 751）、「第二模作」では「元ヴェネチア大使館邸」（同カイエ, fo 71ro : nP.IV, 754）となっているからだ。同書簡の中で、ヴェネチアに言及している（Cor., XIV, p.158）ことも考えると、この手紙執筆以降、ホテル・ダングルテールを「ヴェネチアの元官邸であったヴェルデュラン邸」のモデルとしたと考えることも無理ではあるまい⁽³⁶⁾。

これらの書簡を考慮すれば、「模作」の草稿は、1915年末には書き始められていた可能性があると言えよう。ではいつまでに書き終えられていたのか。

「第二模作」の中に、執筆期を示唆するテキスト⁽³⁷⁾は幾つかあるが、最も後期に書かれたものとして、「ノルマンディーの田舎家に薔薇があり、梨の木が家に象眼された様子」を描写したものを我々は見出だした⁽³⁸⁾。このテキストは、1918年9月24日に『ル・フィガロ』社からプルーストに届けられた「自動車旅行の日々」から取り入れた部分⁽³⁹⁾である。「自動車」は1907年に発表された記事だが、1918年に、プルーストはその原稿も記事も手許になかった⁽⁴⁰⁾ので、「第二模作」にある「梨の木の象眼」は、「自動車」受取り以降に執筆されたことは間違いない。よって、「第二模作」は、早ければ、1918年9月末には書き終えられていたことになる。

以上から、「模作」の草稿全体の執筆期は1915年末頃から書き始められ、早ければ1918年末ころには書き終わられていたと言えよう。

清書カイエにある「模作」の執筆期に関しては、今しがた見た「梨の木の象眼」に関する文章が、下書きカイエの場合とは違って、清書カイエ自体の頁 (fo 108) の本文に書かれているので、「第二模作」執筆よりも後であり、「自動車」がプルーストの手許に届いた1918年9月24日よりも後であることは間違いない。

II-2-2. 「模作メモ」執筆期

「模作メモ」の執筆に関しては、新プレイアッド版の注 (nP.IV, 1367, note 1 sur la page 750) にあるように、「第一、第二模作」及び「74メモ」よりも後に、「前メモ」(カイエ55, fo 62vo) が書かれた⁽⁴¹⁾ ことが明らかになっている。

執筆期に関しては、「第一、第二模作」が、上に見たように、おそらく1915年後半から書かれているので、また、カイエ74の冒頭部 (ffos 5ro-20ro) が1915年中頃から1916年中頃にかけて執筆されたことが、中野氏によって明らかにされている⁽⁴²⁾ ので、カイエの中間に位置する「草稿模作メモ」の大部分は、1915年末頃から書かれていたことになろう。「清書模作メモ」は「清書模作」と一体となって書かれているので、執筆は「清書模作」と同時期であり、1918年9月以降であろう。

新聞記事である「ゴンクール兄弟とその末裔たち」は1922年5月27日付の『ル・ゴローワ』紙に掲載された⁽⁴³⁾ もので、書簡に現れたプルーストの言葉を信じるならば、1922年5月23日には書き終わられ、『ル・ゴローワ』の担当者に送られている⁽⁴⁴⁾。

II-2-3. 「記事」との接点

『ル・フィガロ』掲載記事と呼応する要素として、「第一模作」には「スワン」⁽⁴⁵⁾ 「エルスチール」⁽⁴⁶⁾ の二人の名のみが現れ、「第二模作」には、

呼応要素の全て、すなわち、「夕日を浴びた塔」⁽⁴⁷⁾、「エルスチール」⁽⁴⁸⁾、『コータル家の肖像』⁽⁴⁹⁾、そしてメモの形で「スワン」が描かれているが、「第一、第二模作」とも、「記事」と「模作」との結びつきを明示する言葉は無い。とはいえ、スワンに関する「忘却」が語られている「潜水艦メモ」(カイエ55, ffos 76vo-77vo)は、「模作」と「記事」掲載日のゲルマント邸との結合の萌芽を感じさせる。というのは、既に、「記事」生成過程の第二段階(カイエ48, 1910-1911年)において、ゲルマント邸で、ジルベルトが、「死と忘却との働き*l'œuvre de la mort et de l'oubli*」(fo 40ro)を完遂させ、スワンを人々の記憶から消し去ることが構想されていた⁽⁵⁰⁾からである。

「エルスチール」に関わるテキストを考慮すると、本論I-1-2.で見たように、「模作」が「記事」になる状態に非常に近かったことが判明する。カイエ74 (ffos 81ro-82ro-81vo : nP.IV, 761)で、エルスチールの導き手であったヴェルデュラン夫人が、リュクサンブール美術館に在る肖像画の制作を命じ、靈感を与えていたことが話者によって述べられているのに対して、同カイエ74, fo 76voでは、ゲルマント侯爵夫人が大公夫人に「エルスチール」を譲ったことと、それらの絵がリュクサンブール美術館に在ることを描く指示⁽⁵¹⁾、さらには、伏線として、ゲルマント侯爵の「エルスチール」を見る態度を予め配しておく指示⁽⁵²⁾まで記されているのだ。この頁(fo 76vo du Cahier 74)は、「記事」掲載日に話者が述べる、「ゲルマント侯爵夫人が多くの「エルスチール」を従姉のゲルマント大公夫人に譲ったことを悔やむ」部分(nP.IV, 163)の制作メモになったことは間違いなく、「伏線指示のメモ」は、『ゲルマントII, II』にかかわり、ゲルマント侯爵が問題の「エルスチール」を所有していたことを読者に想起させる部分⁽⁵³⁾に呼応している。ヴェルデュラン夫人とゲルマント大公夫人との、「エルスチール」に関する対立が、「74メモ」において構想されていたことが了解されよう。

カイエ55においても、この対立をプルーストは充分意識している。ヴェ

ルデュラン夫人が『コタール家の肖像』を所有していることが書かれた頁 (fo 78ro du Cahier 55 : nP.IV, 758) があるが、ゲルマント大公夫人が『X 家の肖像』を所有していると書かれた頁も存在していたのだ⁽⁵⁴⁾。大公夫人が、エルスチールが描いたもう一枚の絵である『ダンスの楽しみ』も所有していることが描かれたこの頁は、『囚われの女』に組み込まれて、「記事」掲載当日のゲルマント侯爵邸で話者が思い出す「二枚のエルスチール」に関係する部分⁽⁵⁵⁾となる。

カイエ55, 74における、この状態から、ヴェルデュランとゲルマントとの対立を統合する形で、「模作」を「記事」として示唆するにいたるまでは、僅かな変化を残すのみである。

とはいえ、次の生成段階である『見出された時』の清書カイエにおいても、「模作」は「記事」として書かれてはいないのだから、「記事」としてブルーストに意識される時期は、「模作」が清書カイエに書かれた時期よりも後であり、1918年末以降であろう。加えて、1922年5月27日付の『ル・ゴーロワ』紙に掲載されたブルーストの文章、「ゴンクール兄弟とその末裔たち」において、「記事」と「模作」の同一性が否定されている(『失われた時』のある一巻の中で、『ゴンクール未発表日記』の模作)を、ゴンクール自身が書いたものとして話者が読むと言っている⁽⁵⁶⁾ので、もしブルーストが、清書カイエに「模作」の大部分を書き終えて(1918年末)から、『ル・ゴーロワ』紙に掲載された文章を書き終える(1922年5月23日)までの間、「模作」の役割をまだ決定していなかったならば、『逃げ去る女』の清書カイエXIVで、「記事」が「模作」となるのは、『ル・ゴーロワ』の文章執筆よりも後であり、『逃げ去る女』のタイプ原稿生作(1922年5月末頃から6月25日頃にかけて)の間である。

この時期は、本論冒頭で触れた「シャトーブリアンの隠喩」としての「アイスクリーム」の第二生成段階と一致することからも、「記事」と「模作」とが同一物として認識され始めた時期と言えよう。

残された課題は、「マルタンヴィルの鐘塔の描写文」に修正を施したものを「記事」とする、という印刷稿に存在する文章（nP.II, 691-692；nP.III, 523）の解釈である。というのも、これらの文章は、一見したところ、我々の仮説と矛盾するからだ。次稿でこの問題を検討したい。

注

(1) 拙稿、『『ル・フィガロ』掲載記事』再考（その1）、文教大学紀要第8号（1994）。以下、序で述べることは前稿のまとめにすぎない。

(2) 以後、『失われた時』と略記し、引用に際してはGallimard社の新ブレイアッド版（第一巻1987年、第二巻1988年、第三巻1988年、第四巻1989年）を用い、nP. と記し、巻数をローマ数字で、頁数を算用数字で示す。この版を用いる理由は前稿参照のこと。

(3) 「記事」そのものは小説に描かれていない。

(4) 『見出された時』を含め、死後刊行部分、及びその原稿の状態や執筆期等に関しては、前稿の注（2）、（6）を見よ。

(5) 『逃げ去る女』あるいは『消え去ったアルベルチーナ』に関しては、前稿の序、および前稿の注（3）、（4）、（6）に略述したので参照されたい。

(6) 前稿への言及との混乱を避けるため本論はⅡ章から始める。

(7) 「チザンヌの染みがついた封筒」の中に入れられたメモ。前稿の序、I-4-2、および前稿の注（7）、（42）、（45）を見よ。

(8) 前注（7）を参照のこと。

(9) 書簡集は故Philip Kolb氏編纂・注のCorrespondance de Marcel Proust, 21 vol. parus, Plon, 1970-1993を使用し、Cor. と記し、巻数をローマ数字で、頁数をp.と付し算用数字で示す。

(10) 第三タイプ原稿（NAF 16746）に「アイスクリームの場面」がfo 10に挿入された（Milly, note sur la Prisonnière, p.224, note 25 sur la page 532, Garnier-Flammarion, 1984）時期に関しては、第三タイ

プ原稿作成期より推定可能である。その時期は、以下に引く1922年9月3日付のガリマール宛の書簡を参照すると、1922年9月頃と思われる。

<<[J]e recommence pour la troisième fois ma Prisonnière dont je ne suis pas content et ayant un mal infini à déchiffrer les corrections et surcharges que j'ai apportées aux feuilles, sans cela claires, de ma dactylographe>> (Cor.,XXI, p.456.)

『囚われの女』の四度目の修正が9月21日付の手紙で述べられ (Cor.,XXI, p.483)、修正が一応終わったことが10月末あるいは11月初めの手紙で言及される。この時点でタイプ原稿の修正が終わったことは間違いないだろう。

<<L'espèce d'acharnement que j'ai mis pour la Prisonnière (prête mais à faire relire, le mieux serait que vous fassiez faire les lres épreuves que je corrigerai) cet terrible acharnement [deux mot illisibles] dans mon terrible état de ces jours-ci, a écarté de moi les tomes suivants>> (Cor.,XXI, p.529.)

(11) 第一段階は1908-1909年春にかけて執筆された四冊の下書きカイエ3, 2, 5, 1に描かれている、「記事」掲載日の様子。第二段階は、下書きカイエ48に、1910年1月から11月にかけて、同じく「記事」掲載日の様子が執筆される。第三段階は1910年12月頃に執筆された、カイエ58冒頭の、「記事」掲載当日のブロックの反応。この段階では、「記事」は小説の最終場面に関係していた。第四段階は1913年春頃、カイエ57への加筆メモ。第五段階は清書カイエ執筆(1916-1917年)と、カイエ48からの挿入と、その後の加筆期(1917-1922年)。以上、中野氏の博士論文、第一巻、pp. 393-418、あるいは同氏の<<L'apparition[...]>>, ELLF, no58, pp. 157-160を見よ。『逃げ去る女』のタイプ原稿作成期については前稿、注(6)を見よ。

(12) カイエ48 (NAF, 16688) の「記事」に関する部分 (ffos 27ro-40ro) の執筆期については、中野氏が、切取られた頁を考慮して、1910

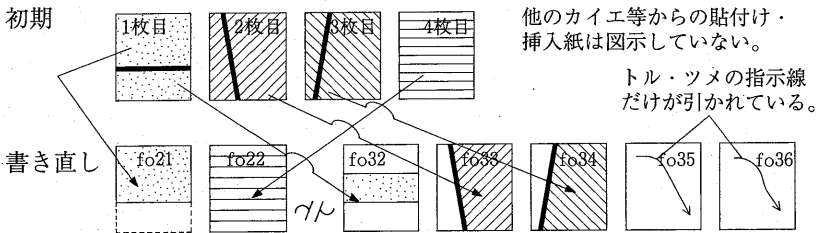
年初頭の新聞記事、制作メモ帳であるカルネ I (NAF, 16637) にあるメモ (ffos 45ro-45vo-46ro) とカイエ48との影響関係から定めた (Nakano, thèse, t.I, pp.400-410) ので、それに従う。カイエ48の切取られた頁については次注 (13) を見よ。

(13) 吉田城氏はその博士論文 (Jo Yoshida, Proust contre Ruskin : étude sur la genèse de deux voyages dans la Recherche d'après des Cahiers inédits, 2 vol., thèse de 3e cycle, Paris IV, 1978, t.I, p.99) で、カイエ48から切取られ、清書カイエXIV へ移された紙片を、形状、文の繋り、透かし模様の繋がりから明らかにした。

(14) 吉田氏の指摘するこの部分の出典、fo 38ro du Cahier 48 (Yoshida, thèse, t.I, p.99) は、正しくは fo 38vo。

(15) 具体的に説明すると、「ゲルマント侯爵夫人が、エルスチールのデッサンを「エルスチールの絵」よりも好きだと言う」部分から、「ジルベルトが、スワンが死と忘却の働きに拍車をかけ完遂させる」部分までが、最終稿よりも短く単純に書かれていた。

(16) 清書カイエXIV の「ゲルマント邸」末尾の初期執筆の四枚が、書き直され、どのような配置になったかを簡単に図示すると次のようになる。



(17) カイエ58で、話者は、「記事」を書いた当日、ゲルマン大公邸へ行く途中でブロックと出会い (ffos 5vo-6ro)、小説家 Margurite Audoux のシャトブリアンのような語り口について述べる (fo 4) が、「記事」の特徴としてではない。NP.IV, 1388 を見よ。

(18) 注 (16) 参照。

(19) 「記事」の『ル・フィガロ』掲載に関する草稿に、ブロックは第三段階から現れているが、「聖水盤」への言及は、清書カイエXIV, fo 32ro への貼付け紙以前には存在しない。

(20) NAF, 16695, ffos 63ro-67ro : nP.IV, 751-753.

(21) NAF, 16695, ffos 69ro-78ro, 73vo-74vo, 76vo : nP.IV, 754-758; ffos 76vo-77vo : nP.IV, 1370-1371.

(22) Cahier XV : NAF, 16722, fo 90ro (deuxième papier collé sur le fo 88?) : nP.IV, 287, ffos 100-115 : nP.IV, 293. Cahier XVI : NAF, 16723, ffos 1-5 : nP.IV, 293-295. 当初、この二冊の清書カイエに書かれていた、文学論→「模作」という順序を、プルーストが後に変更したことについては、nP.IV, 1176, 1177 et 1187, note 4 を見よ。なお、このnote 4には「模作」は清書カイエXV, fo 99 より始まるとあるが、fo 100の誤りか。また、「模作」と文学論との順序変更のメモが、新プレイアットのnote 4にある通り、fo 99 (に付された紙?) から始まるとすると、fo 90 がマイクロフィルムには見当たらない。カイエの状態が「挿入紙」等で複雑になっており、また、マイクロフィルムでは図書館が付した頁が見えない場合もあり、新プレイアット版と本論では頁が呼応しないことがあるので、確認不可能の場合は?を付した。

(23) Cahier 55, fo 62vo : nP.IV, 750-751.

(24) Ibid., ffos 81ro, 82ro et 81vo : nP.IV, 1371-1372.

(25) Cahier 74 : NAF, 18324, ffos 76vo-83ro. 「カイエ74」の「模作」に関わるメモで、新プレイアット未収録部分はffos 77vo, 78vo とfo 80vo の一部分。なお、新プレイアット版にはfo 66vo (nP.IV, 1461, note de l'Esquisse LXIII) とあるが、実際は76vo。

(26) Cahier XV, fo 90 (deuxième papier collé sur le fo 88?) ; Cahier XVI, ffos 56 ; Cahier XV, ffos 91 (?) -99 : nP.IV, 287, 295-301.

(27) <<Les Goncourt devant leurs cadets : M.Marcel Proust>>.

Essais et Articles, précédé de Contre Saint-Beuve, Gallimard, Bibliothèque de la <<Pléiade>>, 1971, pp.641-643. 以後、この巻所収のテキストからの引用は、EAと記し、頁数を付す。

(28) ゴンクール「模作」そのものの生成過程研究は既にMilly氏によってなされている(Jean Milly, <<Le Pastiche Goncourt dans Le Temps retrouvé>>, Proust dans le texte et l'avant texte, Flammarion, 1983, pp.185-211)が、そこには当時未公開だった資料(注(25)に挙げたカイエ74)が欠けているので、Milly氏の研究を補う形で新プレイアッド版が、草稿そのものと、その「注」とも呼ぶべき草稿とを部分的にはあるが収録し検討している。

(29) <<Une note en marge de la seconde ébauche dit que l'instruction est une lutte contre l'oubli très partielle, <<coulant à peine un oubli sur mille, comme les sous-marins allemands>>. Cette remarque [...] a vraisemblablement été faite à un moment où était d'actualité d'échec de la guerre sous-marine des Allemands, c'est-à-dire après l'entrée en guerre des Etats-Unis (2 avril 1917), et même plus tard : c'est en mai 1918 que les Allemands reconnaissent eux-mêmes que le tonnage des navires alliés coulés va décroissant>> (Milly, op. cit., p.186). 該当するテキストの転写は、同書p.200 及びnP.IV, 1371。

(30) Voir Cor.,XIV, pp.280-285.

(31) 献辞は「模作」の草稿には触れていないものの、下書きカイエ55にある『逃げ去る女』の草稿部分と正確な対応をなすことは、吉川氏の指摘するとおりである(Yoshikawa, thèse, t.I, p.9, note 2)。

Yoshikawa, thèse, t.I, p.11, note 3. 新プレイアッド版はMilly説(1917-1918年)を指示(nP.IV, 1367, note 1)。一方、Bonnet、Brun両氏は、戦争は1914年から始まっていることから吉川説を指示する(Marcel Proust, Matinée chez la Princesse de Guermantes : Cahiers

du Temps retrouvé, édition critique établie par Henri Bonnet en collaboration avec Bernard Brun, Gallimard, 1982, p.272 et les notes 1 et 2 sur cette page)。

(32) Cor.,XIV, p.76.

(33) 書簡では、プルーストがゴンクール自身の書いた本物の『日記』を読んで、その内容を忘れてしまうことが述べられている (<<J'ai par hasard ouvert un volume du Journal des Goncourt ([...] j'avais entièrement oublié ce volume dont sérieusement je ne me rappelle rien). C'est inoui et assez grandiose dans l'horreur de ne rien se rappeler>>, Cor.,XIV, pp.78-79 ; souligné par Proust). 「潜水艦メモ」では、作中人物のVerdurin, Swann の同時代人が、ゴンクールが書いたとされる、プルーストの手による『日記』の「模作」を読むが、数年後には完全にその内容を忘れてしまう (<<Quelques années après tout le monde ignore qu'un Verdurin eut une situation littéraire ou Swann une situation mondaine. Cet oubli [...] dont parlent les Mémoires[...] est plus réel qu'il ne semble dans ces mémoires [...] les contemporains ne se rappellent plus, Verdurin est vraiment inconnu>>, ffos 76vo-77vo du Cahier 55 : nP.IV, 1370-1371) ことが描かれている。

(34) <<Imaginez-vous que j'y ai trouvé dans des choses à ne pas croire, sur le jour de l'enterrement de Victor Hugo! [...] Et de même sur ce qu'il dit de l'idolâtrie qu'on a pour son œuvre en Laponie.>> (Cor.,XIV, pp.76-78, souligné par nous.) 「ユゴーの埋葬」も「盲目的崇拜」も、カイエ55, fo 63vo (nP.IV, 752) に描かれている。

(35) Cor.,XIV, p.158.

(36) 新プレイアッド版 (nP.IV, 1190, note 2 sur la page 288) では「オランダ大使館邸」をモデルとしている。

(37) 1918年以降の書簡に頻出する要素が、特に「第二模作」に存在す

る。以下その具体例を二点挙げておこう。

レオナルド・ダ・ビンチに関する言及が、1918年2月13日付の手紙から現れ始め (Cor.XVII, p.109) 「レオナルデスク」という、ゴンクール の口調を模した形容詞が同年3月9日あるいは10日付の手紙 (*ibid.*, p.138)、同年4月3日付の手紙 (*ibid.*, p.159) に現れる。この形容詞は、「第二模作」では、fo 78ro du Cahier 55 (nP.IV, 758) に現れる。

「落ちる (立ち寄る) *tomber*」という、ゴンクール特有の言い回しも、ゴンクールの名とともに1918年4月頃書かれた手紙に現れる (Cor.,XVII, p.190)。既にこの語句が「第一模作」にあること、上に引いた「レオナルデスク」も同時期に現れていることから、この時期に「第二模作」執筆が考えられる。

(38) << (Une Normandie qui serait un immense parc anglais [...] au chiffonnage de roses soufre dont la retombée à une porte de paysans où l'incrustation [de] deux poiriers en laces simule une enseigne tout à fait ornementale, [...]>> (Cahier 55, fo 76ro et papier collé sur ce folio : nP.IV, 757 ; souligné par nous) .

なお、『失われた時』の他の部分に「梨の木の象眼」は描かれていない。語彙検索にはEtienne Brunet, Le vocabulaire de Proust, 3 vol., Slatkine-Champion, 1983 を使用。

(39) <<De vieilles maisons bancales courraient prestement au-devant nous en tendant quelques roses fraîches [...] D'autres venaient, appuyées tendrement sur un poirier que leur vieillesse aveugle [...]le serraient contre leur cœur meurtri où il avait [...] incrusté [...] l'irradiation [...] de ses branches.>> (Marcel Proust,<<Journée de l'automobile>>, Pastiches et Mélanges, Collection de la Pléiade>>, Gallimard, p.63 ; souligné par nous) . この旅行記はノルマンディーを周遊したときのもので、<<Lisieux, Louviers>> という地名が同頁に挙げられている。

(40) 「自動車」がプルーストの手許に届くまでの経緯に関しては、次稿で詳述する。

(41) 「前メモ」には、「Babouche [カイエ74] を見よ」という指摘が二度あり (nP.IV, 750) また、「次の頁以降 [模作] を読んだ時、[...]」という指摘がある (nP.IV, 751) からだ。「74メモ」には模作への言及がある (nP.IV, 1367-1368, note 2 sur la page 750) ので、執筆は「第一模作」を書き始めた時点よりは後であろう。

(42) Nakano, thèse, t.1, pp.162-175.

(43) Voir la note de <<Les Goncourt devant leurs cadets : M.Marcel Proust>>, EA, p.961.

(44) Cor., XXI, pp.218-219.

(45) Ffos 62vo, 65ro du Cahier 55 : nP.IV, 752.

(46) Fo 66ro du Cahier 55 : nP.IV. 753.

(47) Marge du fo 71ro du Cahier 55 : nP.IV, 754.

(48) Fo 77ro du Cahier 55 : nP.IV, 757-758.

(49) Fo 78ro du Cahier 55 : nP.IV, 758.

(50) Yoshikawa, thèse, t.I, p.19 参照。

(51) <<Dans le dernier chapitre Me de Guermantes me dira : <<Je crois bien qu'ils [les tableaux d'Elstir] sont au Luxembourg. Je les regrette assez [...] Je les ai donnés à la pauvre Hedwige [Princesse de Guermantes].>> (fo 76vo du Cahier74 : nP.IV, 952-953, <<Esquisse LXIII, 2>>.

清書カイエでは、この部分は、「最終章」ではなく、『逃げ去る女』の「記事」掲載当日のゲルマント邸での侯爵夫人と関係づけて用いられた。前稿 I-3参照のこと。

(52) <<Il faudra la 1re fois que le Duc me dise. Ça n'est évidemment ni la Source d'Ingres, ni les Enfants d'Edward de Paul Delaroché. Il n'y a pas besoin d'être une [sic.] érudit pour aimer

cela. C'est amusant[,] voilà tout.>> (fo 76vo du Cahier 74 ; souligné comme titre par nous (cf. nP.IV, 952-953)) .

<<cela>>とはエルスチールの絵を指す。

(53) 伏線メモは、下書きカイエ41, ffos 34-36ros (nP.II, 1241-1242)へ挿入された紙に書かれた形で『ゲルマントの方II, II』の草稿となった。このカイエ41において、un éruditではなくune éruditという言い方を保持していることから「伏線メモ」を書き写していることが了解されよう。『ゲルマントの方II, II』の決定稿では、正しくun éruditとなっており、ゲルマント侯爵がこの言葉を発する前に、話者の問いを疎んじながら、コタールらしき人物がエルスチールの庇護者で、侯爵所有の「エルスチール」に描かれていることを語っている (nP.II, 790)。この二枚は、『囚われの女』、及び『逃げ去る女』の中で話者が想起していた。『ダンスの楽しみ』と『X家の肖像』である (nP.III, 905-906)。

(54) <<On Venait de m'apprendre que la P[rin]cesse de Guermantes venait de vendre au Luxembourg, ceux que j'avais tant admirés chez la Duchesse, les Plaisirs de la Danse, et le Portrait de la famille X>>, (fo 41 XIIIvo du Cahier 55 ; ce folio est restitué et transcrit par M. Yoshikawa, (Yoshikawa, thèse, t.II, pp.292-293)).

(55) NP.III, 905-906.

(56) <<Dans un des volumes à paraître de La recherche du temps perdu, [...] mon héros se retrouvant à Tansonville y lit un pseudo-inédit de Goncourt ou les différents personnages de mon roman sont appréciés>>, (<<Les Goncourt devant leurs cadets : M. Marcel Proust>>, EA, p.642) .